



## ハムレット

考察 及川広信 高橋 翠 大野慶人  
演出 及川広信  
衣裳 高橋 翠 眞沢 蓮本みゆき  
音楽 園明 山崎 茂  
舞台監督 若月常夫 製作 宮村 修  
出演 ハムレット 及川広信  
オフェリア 大野慶人  
城山 忠正 大橋純一 多賀徳四郎  
小出 治央 佐々木清 島川 定朗  
若月 常夫

背白いハムレットはレーサーであること  
ハムレットはしあわせの処世術とは縁のない男。かれは知る必要のないことに頭を悩ます。守衛のはてはどうなっているのか、ひとびとのよく語るアイという言葉は、愛のことではなく、目のことではなかろうか、などなど。そのため、かれの眼に写る世界は、あぶなげな仮構の像となる。それでも、カーレーサーの花形だからおかしな話。

魅力あるオフェリアは男性的であること  
オフェリアは積極的に行動する男性的なプレイボーイ。借金と、性病と、心の空虚のバラバラな攻めに分裂して狂死する。破局のなかでも、美しい形骸と、純な心を失なわなかった彼女は、ひととき魅力に輝いていた。だが彼女は蘇生する。愛の心のためではなく、男たちを悪に走らせるために。

すべて愛は凝固し、歴史をつれもどすこと  
ハムレットとオフェリアは偶然にロヤズ喫茶で知り合う。ユレキは感性を酔わせて、2人は愛を感じる。ハムレットは、はじめて、アイとは互に磨け込む心であることを知る。2人は互に見つめ合い、時間は停止し、遠い昔、デンマークのハムレットとオフェリアであったことを想起する。性交の最中、ハムレットは死の顔をのぞき見る。それでもオフェリアは、やはり、自分にとって他物であると思う。愛は死を導き死の瞬間みだらであること。ハムレットは死を感じる。オフェリアに出会ったのは偶然ではなく必然であり、レースで死ぬのも必然であると信じる。死こそ愛にもましてみだらであり、自分を打ち込める唯一のものであると信ずる。  
分散したかれの手足はつめたく、物であった。

